

北海道地震

被災地に何度も足運んで

胸詰まる日々 苦難軽減へ全力

震度7の北海道地震発生から20日、被災地は、いまだ被害状況の把握と対応策に追われています。道内を飛び回り、救援活動の先頭に立つ日本共産党中央委員会9・6北海道地震対策本部の畠山和也事務局長（前衆院議員）に聞きました。（高橋拓丸）

共産党9・6北海道地震対策本部 事務局長

畠山和也さん（前衆院議員）に聞く

日本共産党は、中央委員会と声を響かせる遺族の方の
と北海道委員会にそれぞれ対
策本部を設置しました。私
も、土砂崩れで大きな犠牲が
出ている厚真町へ5度、安
平、むかわ町へ3度、4度
と足を運んで実情をつかみ、
紙屋十彦院議員とともにた
だち道や道に要請してきま
した。移動中におにぎりを口
にする日々、各地を回って、胸
が詰まる思いの連続でした。

震災当日に安平町の避難所
に行った時、避難したお年寄
りが隣の部屋から『おじい
ちゃん助け』と孫の声が聞
こえた。2人とも命があっ
て本当によかったと切々と話
されました。全壊した店舗が
並ぶ商店街、ほうげんと立ち
つまずく女性が「これから町は
どうなってしまうんだろう」と
つぶやきました。

厚真町の避難所を訪問し、
「見つけていただきます」



被災現場を視察する（左から）紙屋十彦院議員、畠山氏、小池晃書記局長ら＝17日、北海道厚真町

被災現場を調査



被災者の話を聞く（左2人目から）畠山氏、三浦恵美子町議ら＝6日、北海道安平町

被災者から聞く

強い意思を示す姿が心に響きました。

避難所暮らしが3週間近くになり、何度もお会いしている避難者の方もいます。そのたびに疲れた様子が目に見えられて心配です。

お子さんを待つ女性からは「夜に余震がたびたびあり、子どもたちがおびえています」と相談されました。

紙屋議員は震災当日、羽田、函館、五稜と航空機を乗り継いで、清田区の被災現場に駆けつけました。被災3町を回り、住民の声を聞き、首長と

懇談してきました。

市民からは「以前から地震沈下があり、何度も市に要請してきた」「陥没は人災だ」と切実な訴えが寄せられています。先の見通しがたらないことに多くの方が不安を募らせ、一刻も早い住宅支援が必要と訴えています。

紙屋議員は震災当日、羽田、函館、五稜と航空機を乗り継いで、清田区の被災現場に駆けつけました。被災3町を回り、住民の声を聞き、首長と

中長期的な支援が必要で、これから冬が駆け足でやってきます。被災者生活再建支援金引き上げと住宅支援と、税や保険料の減免と生活支援が急がれます。地域の防災計画や危険区域の指定も改めて見直すことが必要となります。

農業倉庫が被災し、集荷ができません。収穫の秋なのに大丈夫なのだろうか」と頭を抱える農家の方の話を聞きました。観光の面でも「北海道に行くのは心配」という声があります。生活と経済の両面で日常を取り戻すことがぜひ必要です。

「暮らしていく見通しを早くたてたい」「安心して住める住宅がほしい」と被災地の切実な

要望をいっぱい携え、27日に上京して政府に要請します。

救援・復興へ

町役場では、全道・全国の支援を受け、職員とボランティアが一協力で被災者の生活を支えています。

日本共産党も「国民の苦難軽減」という立憲の精神を発し、各地で救援・復興にと活動しています。新人・ベテランを問わず、地方議員が昼夜分かたぬ活動で住民の元に駆けつけています。厚真、安平、むかわの3町では、自身を被災しているなか、連日、住民を訪ね、寄り添う党議員の姿がありました。

党清田区委員会と吉岡弘子市議候補は、被害が大きかった600軒近郊の被災者を訪問し、要求を聞いています。治安の不安も広がる同地域で、党員が日本共産党の腕章をつけていることで安心して話をしてくれるといいます。党員たちは「これほど腕章を誇らしげに思ったことはない」と胸を張っています。

命の大事さを「つひつひと感じる毎日です。厚真町の伊藤富志夫町議は、震災当日から災情報告や住民の要請をメモにまとめられています。私は「命のメモ」で呼びかけます。住民に寄り添い、心一つに災害を乗り越えようとする気概に燃えて献身する姿が胸を打ちます。

国会と地方議会、そして卓の根で活動する党支部と力を合わせ、被災者の苦難や負担を軽減していくために力を尽くさねばと決意しています。住民の声を国政へ届けるには、来年の参院選での勝利も心に誓っています。

「暮らしていく見通しを早くたてたい」「安心して住める住宅がほしい」と被災地の切実な

響く全域停電

もう一つ重要な問題は、北海道電力が引き起こした全域停電（ブラックアウト）です。地震被害の少ない道東でも、停電で搾乳ができません。乳牛の死亡や生乳廃棄といった多大な被害が出ました。

必要な医療を受けられない